

# 小さな部屋

坂口安吾

青空文庫



「扱さて一人の男が浜で死んだ。ところで同じ時刻には一人の男が街角を曲まっていた」——  
 という、これに似通つた流行唄の文句があるのだが、葦山痴川は、白昼現にあの街角この街角を曲まっているに相違ない薄気味の悪い奴を時々考えてみると厭いやな気がした。自分も街角を曲まる奴にならねばならんと思つた。

葦山痴川は一種のディレッタントであつた。顔も胴体ももくもく脹ふくらんでいて、一見土左衛門を彷彿ほうふつさせた。近頃は相変らず丸々とむくんだなりに、生臭い疲労の翳かげがどこもなく射しはじめたが、いわば疲れた土左衛門となつたのである。

「私に避け難い知り難い嘆きがある。そのために私はお前に溺おぼれているが、お前に由よつて救われるとは思ひもよらぬ。苦痛を苦痛で紛まぎらすように私はお前に縋すがるのだが、それも結局、お前と私の造り出す地獄の騒音によつて、古沼のような沈ちん澱てんの底を探りたい念願に他ならぬ」——

痴川はいつたい愚痴つぽいたちの男である。性来憂鬱はんもんを好み、日頃煩悶はんもんを口癖にして倦うむことを知らない。前記の言葉はその一例であるが、これは浅間麻油の聞き飽あいた（莫ば迦かの）一つ文句であつた。この言葉によれば、痴川はまるで麻油にとつて蔽おほたる支配者の

形に見えるのだが、事實は麻油に輕蔑されきつていた。麻油は痴川の情人でない。情人でないこともないが、麻油は出鱈目な女詩人で、痴川のほかに、その友人の伊豆ならびに小笠原とも公然關係を結んでいた。

痴川に麻油を独占する意欲はなかった。併し女に輕蔑されることを嫌った。惚れられていたかったのだ。こういう所に女に輕蔑された根拠もあつたのだし、それを避けようとして殊ことさら更に泣き言めいて悩み悩みと言ひ慣わした理由もある。地獄の騒音の底で古沼の沈澱を探りたいなどと勿もつたい体ぶつた言ひ草もくだらない独りよがりで、見掛倒みかけだおしの痴川は始終古沼の底で足搔あがきのとれない憂鬱を舐なめていた。探りたい段でなく、探りすぎて悩まされ通していた。

痴川は憂鬱な内攻に堪え難くなると、病身で鼠のように気の弱い伊豆のもとへまつしぐら地に躍り込み、おつ被かぶせるようにして、「むむ、ああ、もう俺はあのけつたいな女詩人を見るのも嫌になつた」痴川は顔を大形おおぎように顰しかめて、いきなり大がかりに胡坐あぐらを組み、さも苦しげに吐息を落すのであつた。「お前はあの女と結婚するのが丁度いいぜ。俺が一肌ぬぐが、お前はあの女に惚れ込んでいるし……」「俺は惚れてなんかいないよ」と、伊豆は不興げに病弱な蒼白あおしろい顔を伏せた。痴川は急にわなわなと顫えだして頬の贅肉ぜいにくをひき

つらせ、ちんちくりんな拳こぶしで伊豆の胸倉をこづいて、「お前という奴は、まるで、こん畜ちく生しょうめ！ 友達の心のこれっばかしも分らねえ奴で……」それから後は唐突な慟哭どうこくになる。慣れてはいるし呆氣あつけにとられるわけでもないが、どうすることも出来ないの、伊豆は薄い唇を兎も角とかく微笑めく顫ふるいに紛まぎらして、ねちねちした愚痴を一々うなず頷くよりほかに仕方かたもなかった。

麻油は女詩人だというが、詩の才能と縁のない呑気のんきな女であつた。深刻な顔付をしたがらないたちで、時々放心ふけに耽ふけるると肉付のいい丸顔が白痴のものに見えた。内省とか羞恥しゆうちとか、いわば道德的觀念とでも呼ばれるものに余程標準の狂つたところがあつて、突拍とつぴよ子うしもない表出には莫迦りこだか惻口りこだか一見見当もつかなかった。ある時、これも内攻に草く臥たひれた痴川が孤独からの野獸の狂躁で脱出してきて、麻油を誘い伊豆を誘い小笠原を誘い、とある山底の湯宿へ遁とんそ走した。男達は複雑な心理錯綜と宿ふつかよ醉いに腐蝕して日増に暗あんた澹たんたる憂鬱を深めたのに、麻油一人は微塵みじんも同化せずに至極のんびりしていた。男は連日早朝に眼を覚した。男は重苦しい宿酔おいに押し潰つぶされる思いで一いつとき時も早く部屋を抜けると冷酷な山間を葬列のように黙りこくつて彷徨さまようのであるが、所在がなくてほろ苦くて、先登せんとうが不意に枯枝を殴り落すと、後の二人も真青な顔で無心に枯枝を叩たたき折っていた。

ひろびろと見晴しのいい曲路へ出ると急に自分の心を拾いあげたようになるものだが、余りの広さに極度に視線を狼狽ろうばいさせた男達は、慌あわただしく渺々びようびようたる山波を仰いで大なる壮快つっくろを繕つくろい乍ら、何ものとも知らぬものへちらめく呪いを感じたり、谷底へ奇怪な戦慄せんりつを覚おぼえたり、喚わきたくなくなったりした。

漸ようやくこの刻限となり男が山へ出払つてのち、毎朝麻油は誰よりも遅れて目を覚した。部屋に陰鬱な乱雑がねくたれていて悪どい空気がじつとり湧わいている中なのに、麻油は悠々と煙草をつけ厚ぼつたい空気の澱みへ耳みみたぶ朶たぶを押しつけるようにしてうつらうつらと頬杖ほぢを突ついていたのだが、まるで蒼空あおぞらの下の壮快を味あじっている快適な姿であった。男が山を降りてくると、麻油は急に唱うたうような楽しさで秘密ひみつつぽく一人一人を掴つかまえ、「あたし、あんたが好き……。」男は一人ずつ怒つたような顔付をした。それには全然とり合あわずにふいと麻油は顔の表情を失うと横へ外らして重たげな冬空を眺め、「あたしはあの空が好きだ」というようなポカンとした白痴の相あに変わかってしまう。麻油は長々と湯につかり、まるでまるまると張り切つてゆく快い発育の音を感じるように、独りぽつちの広い湯槽ゆがねに凭もたれて口をあめぐりあげ、鼻へ快適な小皺せきを寄せて動かかずにいる。

男達が何かしら一度の気配で遣やり切れない憂鬱にはまり込んだとき、麻油も血の気ない

興ざめた顔でいるので、矢張りこの女でもそうかと思うていると、それは一座とまるで違つた軌道でそうなつているのであつて、急に顔をもたげて気がついて男の顔を一つずつ新発見のように見廻しはじめたりするので、男達は愕然がくぜんとして咄嗟とつさにめくるめく狼狽のさなかで故里を思い出したりするのであつた。

麻油は二十二歳まで（男達は三十がらまりであつた）女王の気持でいることが出来た。或日一行に伴ともなわれて孤踏夫人なる女人の許もとへ行つた。これは痴川の女であつて閨秀けいしゅう画家であるが、三十五で二十四五に受取れる神経質な美貌であつた。男達の憂鬱と同量の狂躁を帯びた華やかさで孤踏夫人は上品に話したり笑つたりした。その部屋の空気には霧雨のような花粉が流れていて、麻油にはそれが目や足の裏に沁しみて仕様がなかつた。麻油はむつつりして黙り込んでいたのである。

それから数日して痴川が麻油に会うと、麻油は変な顔をして俯うつむ向き乍ながら、「孤踏夫人て、あんた好き？ ……」又沈黙して今度は一層際立つた顔をしながら、「あんた、あの人と一緒に死ぬ気？ ……」痴川が呆れていると麻油は照れ隠しに青白く笑つたが又真面目になつて、「ああいうお上品な俐口な人が好き？ なら仕方がないけど、でも、あんた、あたし嫌い？ あたしを可愛がつて下さる？ あたしだけ可愛がつて、ね……。」「そうし

て悄然しく首をあげたが、やがて痴川の目を見入って実に嫣然と笑った。痴川は確に呆れた。確かに見当がつかなくなつたのである。

伊豆が痴川を殺す気持になつたのは今に始まつたことではない。痴川は伊豆にとつては毒に充ちた靄であつた。いつたい痴川という人は見掛倒しの人ではあるが、見掛けは甚だしい体臭によつて、相手の気持を仮借なく圧倒する底の我無者羅な人物であつた。身心共に疲れはてた伊豆にとつては是程神経にからみつく負担はないのであつた、初めは一種の畏怖と親しみであつたものが、逆に嵩じて、茫然と限界に拮がり満ちる痴川の生存そのものを忌み呪う気持が伊豆の憔悴した孤独を饒舌なものにした。

伊豆はうつかり痴川に手紙を書き出してしまつたのである。初めはなんの気もなく近況を書き送るつもりで、「私は君の生活力に圧倒されて斯うして独りでいると尚のこと君を怖れ、怖れと共に限りなく憎みたくなるのであるが」——というような書出しのものであつたが、書き出してみると次第に鬱積したものが昂ぶつてきて混乱に陥り、結論だけが妙に歴々と一面にはびこつてきてもはや激情を压える術もなくなつたので、改めて次の意味を率直に、いきみ立つ胸を殺して書きだした。

「私は君を殺す。君が私に殺される幻想を恍惚として飽くなく貪るのがここ数年の私の生き甲斐であった。君は地上の誰よりも狼狽して躡くであろう。現に私の幻想の中で、君は最も醜い姿で七転八倒している。私はそれをやがて実際に見ることになる。呵々」

其れをぶらぶらと懐手に抱え乍ら、変に落着いた蒼白い足どりで投函に行った。末枯れた冬ではあったが、慌しいどんよりした薄明の街であった。その時彼は痴川殺害の事実に就ては実は殆んど考えてはいなかった。ただ彼はこの手紙を受け取った痴川の狂暴な混乱を思い浮べるだけで満悦を感じていた。数日が流れた。無論返書は来なかった。すると伊豆はふいに不安になり出した。手紙の効果に就てひどく疑り出したのである。若しや、あれを読んだ痴川が忽ち伊豆の内幕を見すかしたような憫笑を刻み例の毒々しい物腰で苦もなく黙殺し去った場合を想像するに、体内に激烈な顛倒を感じるような苛立ちを覚えた。一週間ばかり激しい不安と闘っていたが、或る暮方何気ない足取りでぶらりと出ると小笠原を訪れた。例の懐手をぶらぶらさせて、なんだか奇妙に落着き払った風をしながらもつそり突立っていて、小笠原の出て来るのを見ると、まず真青な顔を出来るだけ豁達気に笑わせようとしたのだが、「僕はこんど痴川を殺すよ」といった。

「うんその話は痴川からきいていたが――」

小笠原はまるで欠伸あくびでもするような物憂い様子でぶつぶつ呟くように言いすてたが、暫しばらく無心に余所見よそみに耽たつてから漸ようやくのこと首をめぐらして、今度は一層遣り切れない物憂さで、「ゆうべも痴川と呑んだんだが、あいつは君を実に気の毒な心神消耗者だとそう言っていたっけな……」それから丈たけの高い腰から上をぐんなり椅子へ凭もたせ、頭をがくと反り返らせて、それつきり固着したように天井を視凝みつめている。伊豆は自分の決意を全然黙殺しきつたような小笠原の態度にくらくらする反抗を覚えた。「俺はあいつの腕く様子が手にとるように見える。俺はあいつの首を締めるつもりだが、あいつは血を吹いて醜みにくくじたばたして……」

伊豆はそこまで云いかけると咄嗟とつさに自分もじたばた格好をつくつたが、希代きたいな興奮に堪え難くなつて迸ほとばしるように笑いだした。その笑いは徒いたずらにげたげた言う地響じびきに似た空虚くうこな音だけで、伊豆はその一々の響毎びに鳩尾みぞおちを圧おしつけられる痛みを覚えたが、併しかしなお恰あたかすでにも己おのれに復讐ふくしし終えたような愉悦えつらくに陶醉たうざいしたのである。笑い止んでふと気がつくと、小笠原は相も変らず頭をがくと椅子へ凭もたせて天井を視凝みつめたまま、凡およそ退屈たいくつしきつた苦々しい顔付きで人もなげに放心しんじんしていた。

「どれ……」急に小笠原は甚だ無関心に立上り、伊豆など眼中まなこにない態度で長々と背延せひび

をしたが、「どれ、ぼつぼつ痴川のところへ出掛けようかな……」そう呟いて洋服に着代えて出てきた。「今夜も呑む約束なんだ」そう言いすてて自分はさっさと沓脱くつぬぎへ降りて行つた。伊豆は実に物足りない暗い惨めな気持で小笠原の後に続いたが、戸外へ出ると急にもやもやした胸苦しさを覚え、溝へ蹲しゃがんで白い苦い液体を吐き出した。数分間苦悶した。小笠原は無論介抱もしなかつた。第一振り向きもせず、憂鬱至極な顔付きで茫漠と暮れかかる冬空を眺め耽つていた。聽やがて伊豆が漸くに立ち上る気配を察すると、なお振りむいてたしかめようともせず長足を延ばして悠然と歩き出したが青ざめきつた響しかめつづら一面で伊豆がようよう追付くと、急にぼつんと零こぼすような冷淡さで、「君も行くかね?」「いや」伊豆はがくと首をふつた。「今日は胸が苦しくてとても呑めない」「そう」小笠原は蔑さげすむように頷うなずいたが、「そうかね。じゃ、さようなら」。其処はまだ別れる場所ではなかつたが、伊豆はこう言われたので咄嗟に歩速を緩ゆるめた。遣る瀬ない空虚を感じた。伊豆は力の尽きはてた様子で小笠原の後姿を呆むんやり見送つていたが、聽やがてのことに我に返つて、不思議に自分はあの冷酷な小笠原を寧むしろ一種の親みをもって見送ろうとしているのに氣づいた。いわば小笠原を親愛な一味徒党のように思い込もうとするのである。その理由についてはなぜか伊豆自身深く追及することを避けたがる様子であつたが、つまりは小笠原も

痴川の死を欲しており、且かつまた又自分に痴川の殺害を実行させようと企たくらんでいる、という風に考えたかったのである。だが、伊豆の推量は勿論当てにならない。誰しも二人の敵を打つよりは一人味方に思い込む方が気が楽でいられる。そして伊豆も現在自分の心底にこの傾向のあることを感じ、あまり諸事を掘り下げすぎて自分の馬脚ばきやくを発見したくなかつたので、故意こいに総てを漠然すべの中に据すえたまま、とに角小笠原は自分の親愛な同志であるように感じた。伊豆は小笠原の暗示したところのものを万事深く呑み込んだという形に、ふむふむと大袈裟おおげさに頷き、快心の小皺こじわを鼻に刻んで上機嫌に帰宅した。

小笠原はその持前の物静かな足取りで黄昏たそがれに浸り乍ら歩いていたが、やがて、伊豆の心に起つた全ての心理を隈なく想像することが出来た。彼は自分が殆んど悪魔の底意地の悪さで痴川伊豆の葛藤かつとうを血みどろの終局へ追いやろうとしている冷酷な潜在意識を読んだ。併しかし驚きも周章あわてもしなかつた。永遠に塗りつぶされた唯一色の暗夜を独り行くような劇しい屈託くつたくを感じたのである。全て波瀾曲折はらんも無限の薄明にとぎされて見え、止み難い退屈を驚かす何物も予想することが出来なかつた。彼は冷静な心で、恐らく自分は悪魔であるかも知れないと肯定し、そして洋々たる倦怠を覚えずにいられなかつた。

麻油は伊豆をかなり厭がつていた。その伊豆が、とある白昼麻油の家へ上り込んで来て、

懐手をして無表情な顔付きで突立っていたが、急に手を抜き出してそれをふらふら振り乍ら麻油にねちねちと抱きついてきたので、何をするかと思っていると、先ず麻油の頸から胸のあたりへ手をやり、もそもそ手探りしてのち漸くその襟を握って首を絞めはじめたのである。麻油は驚いた。が非力な伊豆をいっぺんに跳ね返すと、あべこべに伊豆の首筋を執えて有無を云わせずに絞めつけた。伊豆はばたばた跳いて危く悶絶するところまでいった。麻油があまりのあつけなさに呆れながら手を離しても、暫くのうちは仰向けに倒れたまま、尚も締められているように自分一人で跳いていたが、ようよう立上り、のろのろと向きを変えて、座敷の真ん中で四つん這いになると、やがて白っぽい嘔吐を吐き下した。余程苦しいものと見え、数分の間犬の格好をしたなりに身動きも出来ず、顔一面に涙を溢らせていた。

「なんだい意気地なし。痴川が殺せないもんであたしを殺すことにしたの？」

青瓢箪あおびょうたん

！

麻油はそう叫んで冷笑した。

伊豆は返事をしなかった。返事も出来ない程苦しいらしく、尚も四つん這いのまま首だけを擡げ、しよんぼりして嘔りしていた。

「今にみんな殺してしまう」

伊豆はこう言い残すと歩くにも困難な様子で戸口の方へふらついていったが、今度は下駄が探せないらしく、数分間ごそごそして漸く帰っていった。翌朝氣付いてみると、麻油の草履ぞうりや靴を正確に片方ずつ溝へ投げ捨てて帰ったことがわかった。

すると翌日の真昼間又伊豆がふらふらやって来た。黙って這入って来てきよとんと麻油を視凝めていたが、今度は余所見を繕つくろいまるで何処かへ行つてしまふような風をし乍らふらふら近づいてきて、麻油の頸を手探りしようやと襟を握つて絞めはじめた。そうして麻油の頬つぺたを舐なめたのである。麻油は激しく跳ね返した。麻油は怒った。非力の伊豆を仰向けに返すと、又しても悶絶に近づくまで絞めつけた。伊豆は手足をじたばたさせて口中から白い泡を吹いていたが、麻油が手を離してから暫しばらくあつぷあつぷして、おもむろに四よっぴ這はいになると、部屋の中央へ白い嘔吐へどを吐き下した。

その日はすぐ帰ろうとはしなかった。彼は愈々《いよいよ》蒼白となって空気を舐めるような格好をしながら胸苦しさを押えているようであつたが、やおら立ち上つて麻油の腰すにすが縋すがりつくと、自分の方でずどんとぶつ倒れて、自分で麻油の下敷きになった。そのくせ殆んど失心して身体全体を痙攣けいれんさせ、今にも死ぬ人のようにただ縋りついていたのであ

るが、それでも時々拳こぶしでもって麻油の鳩尾みぞおちのあたりを夢心でこづいた。麻油は振り離して起き上った。伊豆の奇妙な変態性欲が領けたのである。麻油は失心したように眼を閉じて動かない伊豆の姿を見下して、暫くの間じつと息を窺うかがっていたが、やがて真白い肉付きのいい二本の腕を忍ばすように静かに延ばすと、伊豆の頸くびを圧えて力強く絞めつけた。白い泡を吹いて、手足を殆んど力なげにじたばたさせて、併し懸命に跳もがいている伊豆の醜状に息を殺して見入り乍ら、麻油はふくよかな胸一杯にぴちぴちする緊張を覚え、春のように上気した軽快な満足を感じた。

或日孤踏夫人は小笠原から伊豆と痴川の曲折をきき、たわいもなく談笑していたが、小笠原が帰るのを見送つてしまうと、急に肩の落ちるような、ほつとした眩暈めまいがした。夫人はむつかしい顔付をして、小波さざなみのようにちらめきはじめた混乱にぼんやりしながら部屋へ戻り、肘掛椅子ひじかけに深く身を埋めたが、自分はいったい今迄何事をそんなに緊張していたのかしらと思つた。そう云えば、自分は痴川の死を希ねがっているのだと、分りすぎるほど分り切つたことをふと思ひ付いたような気がした。本当に、分りすぎる程分りきつたという気がしたのである。成程、少くとも痴川との手切れを欲している以上は死ほど決定的な解決はない筈はずだから痴川の死を希ねがっているのに相違ない。……そして、この怖ろしい考え

がはつきり分つてきても、我ながら可笑しい程夫人は狼狽しなかつた。寧ろ不思議な落付きと安らかな憩いを感じた。そして、まるで蒼空でも仰ぐように、小笠原の顔を睨一杯に浮べたのである。夫人はその顔へ向つて、そう、あたしもそうよ、貴方と同じだわ、という風に媚るように微笑してみせたいようだった。あの人はあんなに落付いた風をして、何の表情も感情も表わさずに淡々と談笑して帰つたけれど、あたしには分る、やはり痴川の死を希つているのだと、夫人は頭がくらくらした。そうすれば、もしそうだとすると、あの方もあたしを愛しているに違いない。——そして、なんだか寒い程引き緊つた気持の中で、一斉に開こうとする花束のような、夥しい微笑がふくらみ、聴て静かな涙となつて溢れ出すのを感じた。

孤踏夫人の家を辞した小笠原は、彼も亦一時にほつと全身の弛むような思いがしたが、静かな足取りで暫く歩いているうちに、孤踏夫人が陥つたに相違ない前記の心理を眼に見るように思い浮べた。そして精巧な策略を仕遂げた詐欺師のような落付いた満足を覚えたが、ふと自分に返ると、苦りきつた気持で、頭の中の映像を大急ぎで一切合財掃除するようにした。彼は急に自分が嫌になつた。自分が邪魔でやりきれなくなつたのである。まるで煩い他人のように其処いらに煩い自分がふさがつていて、厭らしくうんざりした。

考えてみると、自分という奴は全く行き当りばつたりに思いも寄らないことばかりして、伊豆に会えばそれとなく自分も痴川を憎んでいるように暗示してしまったり、孤踏夫人に会えば自分は夫人をさも思い込んでるように暗示したりしてしまふのであるが、現実の自分は、成程その思いは幾分あるにしても、決してそれを一途いちぢずに思い込んでいるわけでない。それどころか、一途に思い込んだものといえ、実は何一つ無いのであつて、考えてみるに、現在ばかりの話でなく過去の一生に於ても、嘗かつて自分は一途に思い込んだということが何一つとしてない。求むるところにのみ人の生存の生存らしいところもあるとすれば、彼は手もなく無存在というべきもので——別にそういう理窟からではないが、とにかく小笠原は自分がないような扱あつかりどころない困惑を感じた。そのくせ、靄ものようなとりとめもなく、それでいて変かに頑がん強きやうな行為がそこにあつて、それが苛いらだ立たしいほど饒じやうぜ舌つなものに感じられ、煩わづらわしくてならなかつた。とにかく酒でも呑もうと思つた。

痴川はなんだか小笠原に悪いような気がしだした。おかしな話で、憎む理由はあつても悪るがることはない筈であるが、併し痴川はなんだか小笠原に悪いような気がした。若しも小笠原に友情を絶たれてしまうと、このさき生きてゆく世界がないような、大袈裟な心配せまが真に迫せまつて湧わいてきて、始終小笠原の顔を見ていないと不安で心細くて今にも消滅し

そんな思いがした。そのくせ会うのも怖いようであり変なようであり足が進まないのであつた。ある晩のこと小笠原を訪ねるつもりで歩き出したが、途中で気がひけ、ふいに思いもよらず、これは一層会いたくもない孤踏夫人を訪ねてしまうと、これは生憎不在であつた。方々彷徨つたあげくに、このまま帰宅してはどうにも引込みのつかない落莫たる思いがたかまり、愈 《いよいよ》小笠原を訪ねる決心を堅めると、こんどは決心の重圧に苦しめられて無性にやるせない 癩癩を覚え、走るように夜道を歩いた。小笠原の住居はひっそりした高台のアパートで、もう辺りの寝静つた時刻であるから、その街角へ現われて街灯の下へ辿りつくと、まるで自分が潤んだ灯に縋りついた守宮でもあるような頓狂な淋しさが湧いてきた。其処から仰ぐと三階の小笠原の部屋に明りが射していたので在宅と判じられたが、うっかりすると不在の孤踏夫人は此辺にいるかも知れないと思われたので、ひどく二人に悪いような気のひけた思いが乱れ、ぼんやりと街灯の下に佇んでいたが、光のあるところでは何かの拍子に顔を見付けられても困るような不安もしてきて、今度はとある暗がりの土塀へ近寄つた。闇の中にぼんやりして三階の窓から洩れる薄い光芒を眺めていたら、やにわに水のような静かなものが流れてきて人を懐しむひたむきな心で油然と溢れてしまい、なんだかわけが分からなくなつて二足三足するうちに、小つちや

い門灯に寒々と照らし出された石の戸口をそと押しして身体が内側へ這入ってしまった。石の廊下をコツコツ鳴らす登あしおと音が際立きわだたしく顛顛こめかみへ飛び込んできて、その静かさがむやみに神経を刺戟したが、時に何処からとも知れない光が階段の途中あたりで顔に流れかかってきて、だんだん気が遠くなるようであった。

部屋の扉をノックして、「いるかい? ……」と言うと、胸がめきめきするほど不安になりだしたくせに、中から返事もない瞬間にもう戸を押ししまっていた。間の悪い光が痴川の顔へ鈍く流れてきたが、眼を丸くして奥を見ると、机に向って何かしていた小笠原が唯一人ぼんやりして振り向いていた。

急に痴川はぼんやりした。部屋へ這入ってゆくと、急に泪が溢れ出した。それが途方もない塊のような泪で、喉がいつぺんに塞ふさがつて、身体も折れ崩れるようであった。

「俺は何て愚かな人間だか、自分でも呆あきれるばかりだ……」痴川は喉のどが通じるようになって、がっかりして嘆息した。彼はだんだん落付いてきた。そうすると、泪となって自分自身流れ去ってしまったように、透명한肉体を感じてきた。

「俺には自分のやることまるまる分っていないのだし、時々これが自分だと思ふものが急に見当らなくなったりして、本当にたよりなく寂しい思いがする……」

小笠原は静かに頷いて、憂鬱な顔をして俯向うつむいてしまつたが、一度心もち眼を上げて痴川の顔をぼかんと見てから、又ぐったり顔を伏せ、組み合した膝の上で手の指を物憂げに動かせていたが、ぶつぶつ呟くように、

「俺達の複雑な生活では、最も人工的なものが本能であつたりしている。斯こういう吾々のこんぐらがつた生活で、自分の批判するくらいの貧困なものはないのであつて、百の内ないせ省せいも一行の行為の前では零ゼロに等しい。文化の進歩は人間の精神生活に対しては解き難い神秘を与えたに過ぎないのであつて、結局文化それ自らの敗北を教えたに過ぎない。畢ひつき竟ようするに人間なるものは、その生活に於て先ず動物的事であることを脱れがたいのだ。だいたい文化に毒された吾々がデリケートな文化生活の中から自分を探し出そうとするのが已に間違つていたのであつて、吾々は動物的な野性から文化を批判し、文化を縦横じゆうちやうに蹂躪りんしながら柄に合つたものだけを身につけて育つようにしなければならなかつたのだ：

…

小笠原は顔を伏せてみたり背そむけたりしながら、眠ねむたげな単調な語勢でそんなことをぶつぶつ喋っていたが、すると痴川もぼんやり俯向うつむいて、わけもなく一々頷うないたりしながら、変に神妙に聞いている風をしていた。その実はひどく退屈していたのだが、併しかしとにかく

小笠原と対座していることだけで平和な心を感じた。

小笠原は痴川を家まで送つてきて、例の感情をうか泛べない冷めたい顔付で、「君は今悪い時じきなのだ。春がきて、それに健康が良くなると、もつと皆んなうまくゆくようになるのだ。身体を呉々も大切にしまえ」と云つて静かに帰つて行つた。痴川は又もやぼんやりして、子供のよう小笠原の言葉を聞いていたが、自分の部屋へ這入つてきて、自分は小笠原と平和な面会を終えてきたのだということが分ると、心安らかな空虚を覚えた。痴川は和やかな感傷に酔い乍ら、白々と鈍く光る深夜の部屋に長い間たたず佇んでいた。

一日痴川が麻油を訪ねてゆくと、麻油は大変好機嫌で、痴川を大歓迎するようにしたが、「小笠原さんて、ひどい人ね——」

「なぜだ……」痴川はどぎまぎした。

麻油はいきなりこうしよう哄笑を痴川の頬へ叩きつけて、

「あんた、怒っているの？ 口惜しがっているの？ あはははは。小笠原さんと孤踏夫人て、ずい分ひどい人達ね……」

痴川はみるみる崩れるような、くしゃくしゃな泣き顔をしたが、急に物凄い見けんまく幕で怒りだして、

「莫迦野郎！ お前なんぞに男の気持がわかるものか。そんなことは男同志の間柄じゃ平気なことなんだ。生意気に水を差すようなことをして、このお多福めえ、気に入らねえけつたいな女詩人だと言ったら……」

「ごめん、ごめん」麻油はいきなり痴川の首つ玉へ囁りついて顔一面に接吻して、

「ごめんなさいね。あたし、悪い気で言っただんじやないの。かんにんしてね……」

顔と顔を合せて痴川の眼を覗き込むようにして、「坊や……」

麻油は嫣然と笑つて、痴川の胸へ顔を埋めた。

翌日痴川と別れてから、麻油はしかつめらしい顔をして暫く火鉢に手をかざしていたが、やがて用箋を持ち出してきて、小笠原宛に次のような手紙を書いた。

「こんなに私を淋しがらせて、よく知っているくせに、なぜ来て下さらないの。もう私のことなんか、思い出して下さらないの。も一度ルネの憂鬱な顔が見たいのだけれど、きつと来て下さるでしょうね。こんなに私を苦しめて」

麻油はにやにやしながら此の手紙を投函して、それからもひどく好機嫌で、日当りのいい街を少々散歩して戻った。

痴川は時々伊豆のことを思い出して、その都度無性に癩癩を起した。そういう時に

は、まるで伊豆が目前にいるような見境のない苛立ちいらだちようで、頭の中で頻りに伊豆を言いまくり遣り込めようとするのであるが、そのはがゆいことといつては話にならない。その伊豆がある朝突然久方振りに痴川を訪ねて来たので、痴川は吃驚する暇もなくみるみる相好そうごうを崩して喜んだ。慌あわてて飛び出して行って、とにかく色々なことのあとであり変な具合ににやにや照れ乍ら「まあ、あがれ」と言うと、伊豆は一向無表情で、まるで人違いででもされた場合のように例の懐手をぶらつかせて黙って立っていたが、急に振り向いて勿論挨拶もせず何一つ変った表情も見せずに、空の袖そでを振り乍ら戻りはじめたのである。痴川は咄嗟に大憤慨して跣足はだしのままに玄関を飛び降りると、伊豆の襟首えりくびを掴まえて顔をねじもどして、

「やい、どういう料簡りょうけんでやってきたのだ。変な気取った芝居は止せ。友達が懐しかったら正直に、懐かしいと言うがよし、友達に存在を認めて貰いたかったら、きざな芝居は止すがよかろう。てめえくれえ、友達甲斐のねえ冷血動物もねえもんだぞ。スネークめ。俺を殺すというのは、どうした——」

「今に殺してしまう……」伊豆は落付きを装よそおうとして幾らか味気ない顔をしたが、「今は力がないから殺せない。今度友達の医者からストリキニーネを手に入れることが出来る

から……」そう言いかけて伊豆は笑おうとしたのだが、笑いは掠<sup>かす</sup>れて単に空虚な響となり、それにつれて瘦<sup>や</sup>せた肩を無気味にゆさぶった。それから暫くして今度は冷笑を泛べると、「お前だって、小笠原を殺す力がないではないか」と言った。

「おや！」と痴川は思った。突然ぼんやりしてしまった。それから急に河のような激怒が流れてくると、同時に泣き喚<sup>わめ</sup>きたくなつたのであるが、その時伊豆の顔付からふと間の悪いような白らけた表情を読んだので、同病相憐<sup>あいあわ</sup>れむというような淋しさを受けた。思いがけない静かな内省が何処ともなく展<sup>ひ</sup>らけてくるような冷たさを覚えて自分でも呆<sup>あき</sup>れるほど妙にしんみりしてしまった。「それは君の場合とは幾分違っている。俺達は色々な余計なことを考えすぎるようだ。俺は無論ある意味で小笠原を殺したいと思っっているし、もつと突きつめたところまで進めば今でも人を殺す力はある。併しただ『考えている』というだけのことは、本当の人間の生活では無と同じことなんだ。人を殺すか、自分で死ぬかするくらい本当のことは或いは無いかも知れんけど、しかし……」

痴川は如何にも自分は眞実を吐露<sup>とろ</sup>すといわんばかりに、恰<sup>あたか</sup>も何か怒るような突き詰<sup>つめ</sup>た顔で吃<sup>ども</sup>りがちの早口で呟<sup>つぶ</sup>いていたが、急に言葉を切った。ふいに喋<sup>しゃべ</sup>るのが面倒臭くなつたのだし、それに簡単な解決法が頭に泛<sup>うか</sup>んだからである。そこで、言葉を切ったかと思うと、

痴川は唐突に伊豆に武者振りついた。そのはずみに子供のように泣きだしていた。痴川は伊豆を振伏ねじふせた。痴川は泣きじやくり乍ら整いしたたみへごしごし伊豆の頭を圧しつけ、口汚のしく罵つたり殴つたりした。伊豆はねちねち笑いながら殴られていたが、やはり痛いのみえて、時々ふうふう空気を吹くようなことをした。痴川は今度は伊豆を笑わせまいとして一途いちずに頬つぺたを捻ひねつたりしていたが、漸く手を離して立ち上つて、尚あ厭あき足らずに数回蹴飛ばしてから、自分の家へ戻らずに往おうらい来の方へ出て、人気ない街へ向つて一散に走り去つた。駈け乍らも頻りに伊豆を罵つていたが、街角を曲ると急にほっとして、腰が崩れる程泪が溢れた。彼は漸く電信柱に縋すがりついて、「俺はどうしよう。どうしたらいいだろう。もう生きたくもない」と言つて、喉が詰つてきて一生懸命胸を叩いているのであつた。

伊豆はどうやら起き上つて、暫く嘔吐おうとを催もよおして苦しんでいたが、それから思い出したように歪ゆがんだ笑いを泛うかべて、崩れた着物を繕つくろいもせずいきなり懐手をして、ぶらりぶらり歸つていった。

あの手紙から三日目の夕暮れに小笠原は麻油を訪ねてきた。翌日別れると、別れぎわにも次の日を約束したのだが、併し麻油は尚も早速用箋をとりあげて前と大同小異の手紙を書き、にやにやしなから投函に行つた。約束の日に小笠原は来た。こんなことを数回繰返

した。憂鬱な顔をそれでも仕方なしに笑わせるようにして近づいてくる小笠原を見ると、麻油はくすぐつたい思いがしたが、誰にするよりも大袈裟な明るさではしやぎながら彼を迎えた。どういうものか、小笠原の物々しい屈託顔を前にして独りで笑ったりお喋りしている最中に、麻油は急に悪戯っぽい顔をして舌でも出してみたいような気持になつてしまふのだが、別にそれを隠す気持にもならないので遂にそうしてしまふと、併し小笠原は別段気にかげずに矢張り憂鬱な顔をして、時々自分の方でも笑おうとしたり喋ろうとしたり努力している。そんな時、麻油はふいに孤踏夫人の神経質な顔を思い出したりした。小笠原の物々しい深刻面の真正面からぶつかつていつて、ほかに格好がつかないのでも苛々しながら同じような物々しい顔を向け合せているに相違ない孤踏夫人の様子は見ものだろうと思つた。麻油は時々ふきだしたくなつて小笠原に頼ずりした。

小笠原は急に東京を去つた。小笠原は親しさに倦み疲れた。親しさのもつ複雑な関心に腐敗した。親愛な人々を見暮らす根気が尽きて、限りなく懐しみ乍ら訣別を急ごうとする広々とした傷心を抱き、それを慈しんで汽車に乗つた。知る友のない海浜の村落へ来て、海を眺めた時、ほつとした。何物にも慰まなかつた小さな心が、縹渺とした海の単調へ溶けるように同化してしまふのを感じて、爽やかな眩暈を覚えた。長い疲れの底

に密封されてきて、もう悪臭を放ちそうな澱<sup>よど</sup>み腐れた涙が、ようやくたらたらと頬<sup>つた</sup>に伝うのを感じた。毎日磯に寝て飽くなく貝殻<sup>もてあそ</sup>を玩んだり無心に砂を握っていたりして、甘い感傷に安らかな憩<sup>いこ</sup>いを覚えていた。

ある雨の昼、孤踏夫人へ海の便りを書いた。静かに雨の降る海のようなひたすらな懐しさで、もし気が向いたら遊びに来てと書き、それを投函して、無論夫人は来るに違いないことを知った。又長い疲れに似た、光の射し込まない部屋のような退屈が、雨の降る海からも洋々と溢れてきた。

生きる気が無くなつたのではないのであるし、それに生きるとか、死ぬとか、差当ってそれを考えてみたわけでもないのに、その夜、催眠<sup>さいみんやく</sup>薬を多量にのんだ。自殺者は往々<sup>おうおう</sup>最も生きたい奴だと昔彼は考えたのだが、自分のような奴は殊<sup>こと</sup>にその一人であつたらしいと思つた。薬をのんでから、彼は一時はひどく逆<sup>ぎやく</sup>上<sup>じょう</sup>してしまつてぼんやりするほど混雑したり、むやみに苦笑したり、時には泣き出したり、それに色々なことをめまぐるしく考え出したのであるが、自殺者は別に勇氣があるわけできえない、無論、どう考えてみても是を気取れる筋<sup>すじ</sup>合<sup>あ</sup>のものではないが、併し自殺者は必ずしも莫迦<sup>まか</sup>だとは結局思えなかつた。どつちみち、無駄な考えごとである。

小笠原は微笑したいほどの遙かな愛情をもつて、沢山の麻油や孤踏夫人や又その愛撫を思い出しもしたのであるが、親愛なるものに訣別したがるかたくなな寂寥は、やはりその時も有るには有つたらしい。とにかく、小笠原は死んだ。

翌日布団をはずれて、材木のように転っていた。

それから一月あまり過ぎたが、痴川は伊豆に逢うことがなかった。伊豆は死よりも冷酷な厭世家振つて、小笠原の自殺した現場へも告別式へも出なかつたので、誰に逢うこともなかつたのである。痴川は伊豆を思い出す度に立腹したが、或る日急に思い立つて伊豆を訪ねた。伊豆に会つて、次のように言うつもりであつた。「俺達三人は皆んな莫迦者だ。広い生々した世界の中から狭苦しい五味屑のような自分の世界を区切つてきて後生大事に縋りついて、ちつぽけな檻の中で変に神経を鋭くして生きたくなつたり死にたくなつたり怒つたりしてみたとところで仕様もない。まるで自分を牢獄へ打ち込んでいるようなものだ。ほかに世界は広々とひろがつている。案ずるに君と俺は結局認めすぎるほど認め合い、頼りすぎるほど力にしあつているのが斯ういう結果になつているのだから、俺達は無意味に神経を絡ますことを止して単にぎつくばらんに頼り合い、澆刺とした世界でもっと健全に愉快に生きねばならん」――

痴川は道々斯う切り出す時の自分の勿体ぶった様子を様々に想像することが出来たりして、ひどく意気込んでいた。ところが伊豆の顔を見たときから、まるで思いがけないことばかり思いつくようになって、飛んでもない別のことをまくしたてた挙句に「お前のようなスネークにはもう二度と会わん」と云って、遂に又散々殴ったり蹴飛ばしたりして泣きほろめいて戻ってきた。

さて窺れた土左衛門は麻油を攫うようにして山の湯宿へ走った。湯へせかせかと飛び込んでみたり、宿の親父と碁を打つかと思いうちにスキーを担いで雪原へ零れてみたり、とにかく気忙しく苛々うろつきまわったすえには、夜が来るとガツカリして消えそうな様子で縮こまつたりしている。麻油は痴川に一向おかまいなしに、まるで自分の一存で来たような落付きようで、ほかに相客の一人もない静かな廊下を濶歩して行って湯につかったり、スキーを習つたりしていたが、痴川と顔が会うときには大概にやにやして煙草をくゆらし乍ら、又その上にも面白そうに笑い出したりするのである。そういう麻油に、痴川は何かというと思痴りかけたり怒つたりした。

ある夜のこと、麻油は鏡を覗き込んで化粧を直したり、それよりも自分の顔を余念もなく眺めたりしていたが、急ににやにやしてしよんぼりしている痴川の方を振り向いて、

「あたし、もう、小笠原さんの顔を本当に忘れちゃった。どうも思い出せない……」  
と、朗らかな声でそう叫んで、とても爽快そうかいに大笑いした。

痴川は俄にわかにぎよつと顔色を変えて、それから暫くして思い出したように上体をよろめかせたが、今度はいきみたつて憤慨して、お前くらい冷酷で薄情な奴はないと喚わめいたり愚痴うそったりしたあげくには、麻油に縋すがりついて到とう頭とうめそめそ泣き出してしまつて、

「俺だけは忘れないようにしてくれ。俺はもう自分のれっきとした身体さえ、手で触れてみても実在するようには呑み込めない頼りない人間だ。この気の毒な可哀そうな俺だけは忘れないように、頼む、お願いだ……」

と悲しい声を張りあげて、断末魔だんまつまのように身体を顫ふるわせて搔口説かきくどいていた。その痴川を麻油は母親のように抱いてやつて、けたたましく笑い出したが、

「いいのいいの。大丈夫よ。貴方の顔は忘れっこないわ。だって、とても風変りなんだから……」

麻油は又一しきり哄笑して、もう文句も云えずに麻油の腕の中でふんふん頷いてばかりいる痴川を一層強く抱きしめ、優しく頬ずりして汚い泪を拭いてやつた。





## 青空文庫情報

底本：「桜の森の満開の下」講談社文芸文庫、講談社

1989（平成元）年4月10日第1刷発行

2015（平成27）年4月15日第47刷発行

底本の親本：「定本坂口安吾全集第一巻」冬樹社

1968（昭和43）年1月刊

初出：「文藝春秋 第一一年二号」

1933（昭和8）年2月1日

入力：日根敏晶

校正：まつもい

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小さな部屋

坂口安吾

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>